
コードギアスSS

キラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアスSS

【Nコード】

N9964L

【作者名】

キリ

【あらすじ】

それは記憶。過去へと繋がる記憶の断片。

コードギアスAFTER STORYとは別に、いくつか書いているSSです。

繋がっている部分もあります。サクッと読める短めの話です。

受胎告知

「子供？」

普段は人形のようにほとんど表情を表に出さない少女　C・C・も、そのときはばかりはひどく驚いた様子で、彼女の数少ない友人であるブリタニア帝国第五后妃マリアンヌ・ヴィ・ブリタニアへと振り返る。

「ええ。三ヶ月になるわ」

そんなC・Cの様子を見て満足そうに笑うと、マリアンヌは自らの腹部を撫でてみせた。

「それは……驚いたな。お前、子供は嫌いだろうか？」

「ふふん。まあ、色々と試してみたくてね」

マリアンヌの言葉にC・Cは冷めた視線を向けるも、まるで意に介さない彼女に対し、あきらめたように小さく吐息を漏らした。

「お前に似て、さぞや腹黒い娘でも産まれるのだろうか」

「いえ、きっと男の子よ」

その確信に満ちた声に、C・Cは怪訝そうに眉を顰める。

「まだ三ヶ月なのだろうか？」

性別が判るには早すぎる。だが、マリアンヌはそのことをまるで疑っていないかのように、さらに言葉を続けた。

「男の子よ。そして、もしかしたら世界を救う英雄になるかもしれない」

そんなマリアンヌの言葉に、C・Cはふいと顔を背けると、視線だけをまだ大きくはない彼女の腹部へと向ける。

「どうか。世界を破壊する魔王になるかもしれないぞ？」

C・Cがそう言って視線を上げると、マリアンヌは「それならそれでいいわ」と本当に無邪気な笑みを浮かべてみせた。

「C・C、貴女は子供をつくらないの？」

「私が、か？」

「ええ。別にできないことはないのでしょうか？」

「そうだな……」

実際に子供をつくったわけではないが、C・Cが嚮主を務めるギアス嚮団からの報告では、彼女が子供を産むことは可能であるとのことだった。

ただし、その場合あくまで普通の人間の子供が産まれてくるであろうとも。

つまりは、仮にC・Cに子供が産まれたとして、ギアス能力を失ったギアス発現の因子を失った、あるいは変化した彼女から産まれてくる子供には、ギアスの資質がほとんど見込めず、ましてコードが移譲されることはありえないということだ。

「例え産まれてくる子供に意味はないのだとしても、一時的な暇つぶしにはなるんじゃない？」

「意味か。マリアンヌ、お前は」

どこまでも残酷で、かわいそうなやつだな。その声はとても小さく、マリアンヌの耳には届かない。

自らの望みのためにお前たちの計画に加担した私には、すでにお前たちを止めるすべはない。もしもそれができるとしたらそれは……。

C・Cは再びマリアンヌの腹部を見つめる。

「それはきつと」

受胎告知（後書き）

ショート・ショート
SSなので、本当に短めに。
これは書いてて面白かった。

守るべきもの

「君が、篠崎咲世子か」

ブリタニア人に多い彫の深い顔立ちの男　デートハルト・リートは、眼前の頭一つ小さな女性に向かってそういうと、そのまま上から下まで値踏みするかのような視線を彼女に向ける。

そんな失礼極まりない扱いを受けながらも、咲世子は特に気にした様子もなく、「はい」と一言につきりと笑みを返すのだった。

「失礼だが、君のことは一通り調べさせてもらったよ」

今でこそ名誉ブリタニア人であり、アッシュフォード家にメイドとして仕える彼女だが、元は日本でSPを輩出する流派・篠崎流の三十七代目であり、超人的なまでの身体能力・体術・変装術を有していることはすでに調べがついていた。

「能力としては申し分ない。ぜひとも、と言いたるところだが……」
デートハルトは顎に手を当てると、少しだけ考えるようにして咲世子の黒瞳を見つめる。

「黒の騎士団への入団動機は、日本人がブリタニアに恭順することを憂いている、とそういうことでいいのかな？」

「ええ」

「ふむ」

デートハルトは元叩き上げのプロデューサーとして、人を見る目には自信があった。その彼をして、咲世子という人間の真意をはかりかねているのである。

だが、それも彼女という利点を鑑みれば些細なことだろうと判断すると、デートハルトは首肯して言葉を続けた。

「いいだろう。君にはとりあえずこのままブリタニアの側にいて欲しい。ゼロには私の方から伝えておく。追って連絡しよう」

そうなのだ。彼女の真意がどうであれ、篠崎咲世子を手の内に置くことは、デートハルトにとって都合がよいのであった。

デイトハルトが彼女に注目したのは、何も彼女に特殊な能力があったからというわけではない。彼女が仕えている人間に、もともと関心があったからなのである。先のような彼女の素性を知ったのは、その後であった。

彼女が仕えている人間　それもアッシュフォードではなく、そのアッシュフォードから命を受けて身の回りの世話をしている兄妹にこそ彼の関心はあり、その動向についても把握しておきたいと考えていた。

そして、地元の名士であるアッシュフォードの情報も手に入れることができる。

そういった意味で、彼女の存在は実に有益であった。

「ぜひ、宜しくお願い致します」

そう言つて咲世子が深々と頭を下げると、デイトハルトは彼女に背を向け、その場をあとにした。

*

「本日ルークとの接触到に成功。引き続きキングの動向を探るべく内部への潜入を試みます」

場所は、アッシュフォード学園内のクラブハウス棟裏。誰にともなく咲世子がそういうと、近くの植え込みからガサリと音がして、そのまま何者かの気配が遠ざかっていく。

それは、アッシュフォードからの連絡係であった。

潜入工作。つまりは、そういうことである。

黒の騎士団は、ブリタニア帝国第3皇子であるクロヴィス・ラ・ブリタニアを殺害している。現在彼らは正義の名の下にブリタニアと抗戦しているが、その目的がブリタニア皇族やそれに準ずるものの殺害だとするとまずいことになるため、彼らの動向を探るべく咲世子を黒の騎士団へと密偵として送りこんだのであった。

アッシュフォードがそれをする理由は、咲世子が世話をする兄妹

にある。

ルルーシュ・ランペルージとナナリー・ランペルージ。

いずれも先の日本対ブリタニアの戦争で死んだことになっているものの、アッシュフォード家の庇護の下、素性を隠して過すこととなった皇族である。

二人が生きていると知られば、危害は彼らにも及ぶかもしれない。

彼らはアッシュフォードにとって再興のための隠し玉とも呼ぶべき存在であり、守り通すべき秘密なのである。当主であるルーベン・アッシュフォードにはまた別の思惑があるのだろうが、咲世子にはそれを知るすべがなかった。

「咲世子さん？」

そうして振り向いた先に、件の兄妹のうち妹であるナナリーが、車椅子に乗った姿でそこにいた。

「ナナリーさま……」

「よかった。やっぱりそちらにいらしたんですね。先程咲世子さんの声が聞こえたので」

ナナリーは微笑を浮かべ咲世子の方へゆつくりと近づいてくる。母親の死を目撃したことによる心的外傷後ストレス障害によってその瞳はかたく閉ざされ、脚も不自由ではあるものの、この少女はいつもこうして朗らかに笑う。

まるでそうすることが、自分の役割であるかのように。

咲世子はそんな彼女を、不憫に思っていた。

「こんなところで何をなさっていたんですか？」

「お掃除ですよ」

そう言うてにつこり笑うとナナリーの背後にまわり、車椅子を押して表玄関へと向かう。

アッシュフォード家の意向というものもあるが、咲世子はナナリーとその兄であるルルーシュを純粹に守りたいと考えていた。

彼らには争いとはどこか遠いところで幸せになって欲しい。

そのためには、自分が黒の騎士団内部へともっと深く潜る必要がある。

「 ナナリー」

「あ、お兄様！」

黒髪に制服姿の青年が、こちらに向かって手を振り近づいてきた。

その様子を、咲世子は笑みを持ってむかえる。

「お帰りなさいませ。ルルーシュ様」

のちにブラックリベリオンと呼ばれる争いの最中、ナナリーがアッシュフォード学園からさらわれたのは、それからしばらくしてのことであった。

守るべきもの（後書き）

咲世子さんの目的は何だったんだろうと考えて書いた話です。
これだけだと足りないので、いつか他の話も書きたいなあって。

心の罪

「そう。それが貴方の答えというわけね」

女性と見紛う美しい顔立ちが印象的な青年　カノン・マルディ

「二は、目の前に立つ仮面の男に向かってそう言つと、小さく息を吐いた。」

仮面の男　ゼロは黙つたまま、その場を動こうとはしない。

「……なら、私は行くとするわ。もう二度と、貴方とも会うことはないでしょう」

ゼロの横を通り過ぎ、カノンは牢の外へと向かう。

「　シュナイゼルには」

仮面の奥のくぐもつた声が、狭い牢の中に響き渡り、カノンは行く足を止めた。

「　あの方にも、もう会うことはないわ」

その言葉に、ゼロがゆっくりと振り返る。

カノンは僅かに顔を傾け、ゼロへと視線だけを向けると、静かに言葉を続けた。

「私はね、未来を語る人間が嫌いな。現在を見ようとしなくて、未来の理想ばかり語る人間がね。シュナイゼル殿下は違った。現在の条件下で、最善を尽くす事のできる人。だから、あの方が創る世界を見てみたかった」

視線を牢の外へと戻すと、カノンはどこか遠くを見るように目を細めた。

「でもね、気付いたのよ。いえ、気付かされたのね。あの方が創ろうとしていた世界は、現在という日が永遠に続く未来のない閉じた世界だということに」

それが正しいことなのかどうか、カノンにはわからない。

だが確かにあの時、シュナイゼルがルーシュと言葉を交わしたあの瞬間、カノンは未来が欲しいと思つてしまったのだ。

「それに、あの方はきつと今の方が幸せだと思っから」

カノンはシュナイゼルに、現在の先にある未来も見て欲しかった。人は欲があるからこそ、未来を夢見る。今よりもつと贅沢な暮らしをしたい。今よりもつと幸せになりたい。そうした執着すべき欲が、彼にはなかった、

皇帝にもなれば、簡単に死ぬことはできない。自らの命にすら執着しない彼も、きつと何かが変わるだろうとカノンは考えていた。

だが、おそらくは例え皇位についたとしても、シュナイゼルは変わらなかっただろう。

そして皮肉にも、ギアスはシュナイゼルに生きる目的を与えたのだ。

「今のあの方に会って、私がすべきことは何もないわ」

そう言ってかぶりを振ると、カノンは再び歩き出す。

「私も、自分で答えを出さないとね」

その言葉を最後に、彼は振り返ることなく牢の外へと消えていった。

心の罪（後書き）

カノンの話も書いとかないと思って書いた話です。

特に中身はありません。

何にも考えずに書いたので、最初タイトルはカノンだったしw

微笑

「守護者の一族、ね」

波打つ黒髪を耳の後ろへとかけ流し、マリアンヌ・ヴィ・ブリタニアは呟いた。

「飛び抜けた身体能力に、ギアスを発現することのできる可能性を持つ者。つまり、私やビスマルクがそうだというわけね」

彼女は手にした嚮団の報告書から視線を外すと、傍らに立つ男の顔を見て微笑む。

「いえ」

正確には、と男は言葉を続ける。

「ヴァルトシュタイン卿は確かに守護者を輩出する円卓の騎士に連なる大貴族にございますが、マリアンヌ様におかれましては……」

「確かに、貴族ですらないわね」

産まれながらの騎士であるビスマルクとは違い、彼女はその能力が認められラウンズに叙されたものの、出自はただの平民にすぎない。

「おそらくは隔世遺伝のようなものではないかと推測されます。非常に稀有な例ですので、正確にはなんと……」

隔世遺伝。個体の持つ遺伝形質が、その親の世代では発現しておらず、祖父母やそれ以上前の世代から世代を飛ばして遺伝しているように見える遺伝現象。

マリアンヌの両親も祖父母も平民に過ぎないが、それよりも何世代か前におそらくR因子を持つものがいたのではないか、というのが嚮団の見解だ。

だが、ギアス能力の発現を促すR因子については、未だ解明されていないことが大半を締めしており、確かなことはいえないというわけである。

「なるほど、突然変異みたいなものね」

マリアンヌはふつと笑みを消すと、鋭く目を細めて言葉を続けた。
「それで？ 他に同様の力を受け継ぐ血筋というのはいるわけよね？」

「え、ええ。そちらも資料として一覽を作成しております。ヴァルトシュタインの他に、可能性としてヴァインベルグにシュタットフェルトなどの名門貴族があげられます。その他に可能性のある貴族につきましては、血の紋章事件の折に……」

「ああ、私が殺した連中ね」

マリアンヌはこともなげに言うと、手持ちの報告書へと再び視線を移した。

血の紋章事件。シャルルの叔父に当たるルイ大公が、当時のナイトオブワン以下多くの者を煽動して引き起こした大規模闘争事件。

この事件ののち、シャルルは事件に関係した者たちを一族郎党にいたるまで大粛正を行っていた。

「となると、やはり難しいか……」

ひとりごちるマリアンヌの視線が、報告書のある一点をみつけたとき、うつすらとその美しい顔に微笑が戻ったことを男は戦慄の思いで見守る。

「そう。確かコーネリアのお友達、ファランクスといったわね。エクトルの傍流だけれど、いえ、だからこそ」

使い捨てても惜しくはないか。

男はマリアンヌの唇が、確かにそう告げるのを聴いた。

微笑（後書き）

何でカレンはあんなに強いんだっつー推測話です。
ギアス響団の子供たちについては、また別に書きたいなあ。

就任前夜

神聖ブリタニア帝国首都、皇宮ペンドラゴン。

豪華な装飾が施された広間に、二つの人影がある。

「いよいよ明日だね」

「……ああ。俺たちの計画　その第一段階がこの場所から始まる」
ひとりは癖の強い栗色の髪に幼い顔つきをした青年　枢木スザク。

そしてもうひとり。スザクと壇上の玉座を挟み向かい合うのは、
艶やかな黒髪と紫の瞳をした青年　ルルーシュ・ランペルージで
あった。

いや、正確には復讐を決意した赤き灯火ランペルージではなく、ルルーシュ・
ヴィ・ブリタニアという真名を取り戻したこの国の第十一皇子。

彼らは翌日に迫る計画の最終確認のために、この玉座の間へと訪
れていた。

「すでに皇宮に詰める警備の八割は、ギアスによって掌握している」
「ギアスカ……」

スザクは一瞬眉間に皺を寄せ苦い顔をするも、すぐに冷静な表情
を取り戻し、ルルーシュへと鋭い眼差しを向ける。

「残る二割は当日の警備兵と、各皇族や貴族たちが連れてくる騎士
たちか。　予定通りだね。それで、他の点については何か？」

「ふむ。問題がひとつだけある」

「何だい？」

スザクの表情には、問題があれば今すぐにも自分が排除すると
いう強い決意が刻まれていた。

そんなスザクを横目に、ルルーシュはふつと吐息を漏らす。

「俺が作製中であつた就任式典様の服なんだがな、困ったことに間
に合いそうもない。今からギアスを使い分担作業にしたとして、縫
製が明日いっぱいばかりそうだ」

「なっ!? だからあれほど仕立て屋に頼もうと言ったじゃないか！」

「仕方ないだろう。まさかこうまでブランクが影響するとは……。ナナリーの服を作っていたときは、数日もあればたった二着、パタンナーから縫製まで余裕だったんだが」

「ルルーシュ！」

「だが慌てるな。すでにこうした場合も想定済みだ」

「代わりに着ていく服があるとでも!? 今持っている服なんて、現状僕たちが身に着けている私服か、ボロボロになったラウンズやゼロの衣装、それでなければ学生服くらいなんだぞ！」

「それだよ。俺たちには学生服がある」

ルルーシュは大胆不敵な笑みを浮かべ、さらりとんでもないことを言った。

明日の計画ではルルーシュがブリタニアの皇帝へと就任し、実況が全世界へと流れるのである。

そんな威厳をみせつけなければならぬ大舞台上で学生服の着用など、まさに前代未聞のことであった。

「何だつて!? 正気か、ルルーシュ！」

「もちろんだ。詰襟学生服は冠婚葬祭どんな局面においても対応できる究極の正装。まさに万能服であり、ファッション界のユーティリティ・プレーヤーじゃないか！」

「そうだけど! いや、そうじゃなくて!」

「スザク! 覚悟を決める。俺たちにはもう、引き返す道なんてないんだよ」

ルルーシュは苦渋の表情でスザクに決断を迫る。

重い沈黙が、彼らの間に流れた。

「……わかった。わかったよルルーシュ」

「わかつてくれたか」

安堵の表情でルルーシュが胸をなでおろすのを横目に、なにやらスザクは無表情で天井を見上げる。

「なら、僕からも一点。やはり警備上、君の安全の事を考えると、僕の待機場所は玉座の真上　天井裏がいいと思うんだ」

「ん？　それはすでに却下したはずだぞ」

計画では皇帝就任と同時に、ルルーシュがスザクを自らの騎士に叙する予定であった。

それも皇帝直属の十二騎士　ナイトオブブラウンスのさらに上の位であるナイトオブゼロとして。

世界に畏怖を与えなければならぬ存在が、天井裏から飛び降りてくる姿など、滑稽としか言いようがないとスザクの提案を却下したのだ。

「でも、演説の真つ最中に銃弾が飛んできたら、君を守れない」

「それは心配ない。謁見の席には拳銃など持ち込ませぬよう、入念なボディーチェックが義務付けられている」

口の端に笑みを浮かべたルルーシュに、スザクはまるでひとり言のように無表情でその言葉を口にする。

「ユフィの」

思いもよらぬ名前が出てきたことに、ルルーシュは一瞬びっくりと身を震わせると、構えるようにしてスザクへと向き直った。

「ユフィの特区式典のとき、誰かさんは確かそれでも銃を持ち込んだはずだよな？」

「うぐう！」

確かに。かつてユーフェミア・リ・ブリタニアが行政特区日本を富士で宣言した折、NMFガウエインとともに現れたゼロは、検知器では見つからないセラミックと竹を使用したニードルガンを会場へと持ち込んでいる。

あまつさえ、その銃がブラックリベリオンという大惨事を引き起こすきっかけとなったのだ。

そしてそのゼロの正体こそ、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアなのである。

「だ、だが、それとこれとは……」

「一緒だよ。あのとき同様、最悪の方向へ向かう可能性がある以上、今度こそ僕にできる最善を尽くさせてもらう。なぜなら今の僕は

」
スザクは真つ直ぐにルルーシュを見据え、言葉を続けた。

「僕は、君の剣だからね」

「スザク……」

ルルーシュはスザクの視線を受け止め、拳を握り締める。

「そうか、わかった。明日は必ず成功させよう」

「ああ。僕たち二人が揃えば」

「できないことなんてない」

そんな彼らを離れて見守る人影が三つ。

「どうなんだろうな、アレは」

「言っていることは素晴らしいんですけど……」

「どうなんだろうねえ」

C・C、セシル、ロイドの三人は、一部始終を見なかったことにして、明日に向けて早々に部屋へと戻り眠りにつくことにした。

就任前夜（後書き）

特に変更点はないです。

シリアスな話ばかりだとつままないんで書いた話です。

雨

はい。殺した人の数は覚えていません。歯を磨いたり、食事をしたことを数える人はいません。同じことです。僕のギアスは暗殺に向いている。そう言われました。だから殺してきました。他にいるところもなかったし。潜入工作？ 弟役ですか？ 僕にやれるでしょうか……。僕は、親も家族も知りませんから。……いえ、それが命令なら。

僕の兄は、ルルーシュ・ランペルージ。

*

雨が、降っていた。暗く、底の見えない穴のような空から、黒い線のように降り落ちてくる雨。

そんな雨の中を、少年がひとり傘も差さずに歩いていた。

濡れたアッシュブロンドの髪。年の頃は十四、五歳といったところか。どこか消え去りそうなほど儂げなその少年の名を、ロロという。ファミリネームはない。彼には、家族と呼べるものが存在しないからだ。

彼の手には、一丁の銃が握られていた。

その場所からおよそ二〇〇メートル先で、たった今人をひとり殺してきたばかりである。

彼の属するブリタニアに、仇なす各国要人の暗殺。

それが彼に与えられた任務であった。

「さすがだね、ロロ」

「……！」

指定されていた合流地点。逃走するために用意された車に乗り込もうとしたところで、車内からその声をかけられる。

そこには、ロロよりも幼い外見の、長い金髪に不敵な笑みを浮かべた少年がいた。

「どうしたの？ 早く乗りなよ」

金髪の少年　V・V・に促されて、ロロは車内へと乗り込む。

そうして、ドアが閉まったところで運転手が車を発進させた。

「それにしても久しぶりだね、ロロ」

「そう、ですね……」

「そうだよ。君をギアス嚮団から拾い出して以来だ」

ギアス嚮団。それは、ギアスという力を研究するための組織。

その場所でロロは産まれ、絶対停止の結界　ロロを中心にして範囲内にいる人間の体感時間を停めることのできるギアスを手に入れた。

V・Vはその場所で嚮主として、神に近いものとして崇められていた存在であった。

「そうそう、君の弟たちも元気にしているよ。最近はギアスの発現率も増えてきていてね」

弟たち、とV・Vはいう。

だがそれは、正確ではない。ロロをはじめとして、嚮団内で産まれた子供たちには、親というものは存在しない。

それは、彼らが体外受精により生みだされた試験管ベイビーだからである。

もともと、ギアスを発現させることのできる人間には限りがあった。『王』の血を受け継いでいるブリタニア皇室においても、すべての人間がギアスを発現できるわけではないように。

そこで考えられたのが、ギアス発現を促すR因子を組み込んだ人造人間というわけである。

天然物が希少であるならば、養殖すればいい。

だが結果として、それにはいくつかの不具合が生じる。

人工的生みだされたギアス能力者の多くが、ギアスを使用する際に何らかの身体的トラブルに見舞われたのだ。つまりは、失敗作。

ほとんどは実験中に死亡していった。一部かろうじて生き残ったものの末路も、すでに処分と決められていた。

そうしてその中に、ロクの姿はあった。

君のギアスは暗殺に向いているね。

そういつてロクを処分から拾い出したのが、V・V・Vであった。

「……何か、何か特別な任務があるのでしょうか？」

「うん？」

ロクの問いかけに、V・V・Vが面白いものでも見るかのように小首を傾げた。

「いえ、わざわざ僕に会いに来られたようなので……」

「うん、そうだね。やはり君がいい。いやね、実際誰にしようか迷っていたところだったんだ。だけど、そう。君のような紛い物にこそ、今度の任務はふさわしいのかもしれないな」

紛い物、という言葉に、ロクはびくりと震えるように反応する。

「よし決めた。シャルルには僕から話すことにしよう」

自分の知らないところで、何かが決められていく。

だが、それをどうにかしようなどとは思わなかった。

任務さえ果たすことができれば、少なくとも今すぐ処分されることはない。明日へとつなぐことができる。

このときのロクには、未来や希望などというものはただの言葉でしかなかった。

車内から窓越しに外をみつめる。

雨は、当分止みそうになかった。

雨（後書き）

さっき書きあげたばかりのSSです。構想から執筆まで2時間ちょい。

突発的に考えたにしては、まあまともな話ではないかと。

AFTER STORYと違って、SSは思いついたら書きちゃうので、何か題材があったら教えてください。募集してます。

誓い

「ハハハ、私がお前たちの母親を殺したと？ そんなことがあるわけじゃないか。それとも、何か証拠でもあるのかね？」

そう言っつて男は手にしたワインを一気に飲み干す。

そこは、豪華な調度品に彩られた屋敷であつた。当時財政難により傾きつつあつたブリタニアという国にあつて、民衆から巻き上げた税によつて皇室の威厳を保つために彩られた虚構の屋敷。

その屋敷の所有者たる男の前には、ひとりの少年が立つていた。少年は肩まで伸ばした長いブロンドで顔を隠すように俯いているため、どのような表情をしているのかわからない。

ただ、少しだけその声は震えていた。

「もう一度、僕の目を見て言っつて頂けますか？」

「……いいだろう。何度だつて言っつてやるうじやないか。それで気がすむのならね」

「……ジ・ブリタニアが真実を求める」

「うん？」

ぼそりといつた少年の言葉に、男が首を傾げ少年の顔を覗き込もうとする。

「もう一度訊く。あなたが僕らの母さんを殺したんだね？」

そうして顔を上げた少年の瞳に、鳥が羽ばたくような形をした紋章が浮かび上がった。

「そうだ。私がつた」

次の瞬間、男ははつきりとそういつた。

何が起きたのか当の本人にもわからず、男は愕然とする。

ただ、何か抗えぬ力が自身に働いていることだけがわかつた。

「私が指示して馬車に細工をし、事故に見せかけてお前たちの母を殺した いや、これは！」

自分の意志に反して口を衝いて出る言葉に、男は慌てて口を押さ

える。

「ち、違う！　今は違うんだ！」

「何人も、僕の前では嘘をつくことができない。それが僕のギアス」
そういつて少年は胸元から取り出した銃を、男に向かって突き付けた。

「待て！　私じゃない！　私じゃ……」

「この、嘘つき」

パン、と乾いた音が室内に響き渡った。

ドサリとまるで糸の切れた人形のように男が前のめりに倒れる。

うつ伏せに倒れた男の胸から赤黒い血が大理石の床に広がり、少年の足を濡らした。

「なるほど。便利だね、このギアスという力は。　終わったよ、

シャルル」

そういつて振り返った先に、少年の弟　シャルル・ジ・ブリタニアはいた。

長い波打つアッシュブロンドの髪に、少年とよく似た面立ち。

彼は身を震わせながら、兄とその足元で血を流す男とを交互にみやった。

「……兄さん」

震える声で兄を呼ぶ。そんな弟に優しい笑顔を向けて、少年はいつた。

「シャルル、決めたよ。僕はコードを継承する。そして君にギアスをプレゼントするよ。その力を使って、君はこの国の皇帝になるんだ」

「僕が……？」

「そう。もちろん僕も協力するよ。二人でこの嘘だらけの世界をぶち壊してやるんだ」

「でも、僕よりも兄さんの方が……」

皇帝にはふさわしいと口を開きかけたところで、少年が彼の唇へと人差し指を押し当てる。

「僕はお兄さんだからね。この呪われたブリタニアの宿業は、僕が受け継ぐから」

だから二人でこんな嘘だらけの醜い世界を創った神を殺そう。

「嘘のない世界で、君は、君だけは幸せになるんだ」

たったひとりの弟。

権謀術数渦巻く皇室の中にあつて、弟シャルルが幸せに過ごさせる世界を創ることが、後にV・Vと呼ばれることになる少年の唯一の望みであつた。

誓い（後書き）

うおう、後書き書く前に間違っ て編集ボタン押したや。

V・V・もコードを手に入れる前はギアスを持っていたわけで。
そんなV・V・のギアス能力についてのお話です。

「コードの継承について?」

C・Cは振り返ると、そこに立つV・Vという名の少年の顔を見る。

「そう。僕たちを不死たらしめる、このコードの継承についてさ。そういつてV・Vは自らの額を差して笑った。

「これは君が教えてくれたことだけれど、コードは能力が一定以上のギアスユーザーであれば誰にでも移すことができ、逆に奪い取れることもできる。僕がこのコードをシャルルの代わりに前任者から奪ったようにね」

「それで?」

C・Cは自らがコードを与えられたときのことを思い出し、少しだけ不快そうに眉を顰めてV・Vの言葉を促す。

「ただし、コードが移っただけでは不完全だ。コードが肉体に現れることはなく、人間のままの状態を維持する。この状態にまで遡ることをC・C、君は封印と呼んでいたが……。完全にコードを継承する。つまり人でなくなるのは、継承した人間が死を迎えなければならぬ」

「だからそれがどうしたと言うんだ」

「まあ、聴いてよ。伝承の中にある救世主や英雄と呼ばれるものたちが人でなくなるのは、人としての死を迎えたときだ」

それは例えば、ナザレのイエスやジャンヌ・ダルクと呼ばれるものたち。彼らがギアスユーザーであったと、V・Vは推測していた。

「死後の復活。僕はこれに、コードの謎を解く何らかのヒントがあると思うんだ」

後にV・Vはこのときの考えを元に細胞自死 アポトーシスの逆を表す言葉としてノスフェラトリスという言葉を作る。そし

て、彼なりの進化論を論じるようになるのだが、それはまだ先の話だ。

「ふっん」

C・C・はまるで興味がなくてもいうように、肩をすくめた。

「お前は本当にそういうのが好きだな。何にでも理由があると思っている」

C・C・の言葉に、V・V・はふつと笑みを浮かべた。

「理由があると信じて何が悪いんだい？ 漫然とただ受け入れるだけであるよりは、はるかに意義のあることだろう。それに、そうでもない」と

己の存在を ひいては自分たちがこれから行なおうとしている『神殺し』を肯定することができなくなる、か。

それは、C・C・にとっても同じことだった。

何故不死としてこの世にあり続けるのか。

不死であることに、意味があるのではないか。

長く生きていく中で、それを真剣に探したこともある。

しかし結局のところV・V・、それは人も同じなんだよ。どこから来て、どこへ行くのか。存在意義。その答えを見つけるには、お前が私以上に長生きしなければ不可能だろうな。

r a i s o n d · e t r e (後書き)

書いてたやつが全部消えたので、繋ぎで短い話をひとつ。
ということ、今度こそ次がSS最後です。

君の名を呼ぶ

『俺は……世界を壊し……世界を……創る』

1

「ここは？」

気がつけば、ルルーシュはひとり闇の中に立っていた。

深海のように光が届くことのない、深く 重い闇。

考える。ゼロ・レクイエムの仕上げとして、ゼロの格好をしたスザクに胸を貫かれ自分は息絶えたはずであった。だとするならば、ここは

そこまで思考を巡らせたところで、周囲に淡い光が灯った。それは、見知らぬ人間の名が冠せられた数多のキャンドル。その光ではじめてルルーシュは背後にひっそりとそびえ立つ巨大な門の存在に気づいた。

それが何なのか、ルルーシュは知っている。

「地獄の門、か」

写真でしか目にしたことがなかったが、それは確かに近代彫刻の父であるフランソワ・オーギュスト・ルネ・ロダン作の巨大なブロンズ像『地獄の門』であった。

地獄の中を表現するために数多くの小像から構成されていて、どの像も小さいながら苦悶や嘆きなどを表している。

「この門をくぐる者は一切の希望を捨てよ なるほど、C・Cの言っていた通りだな」

この世界において、地獄というものは存在する。

正しく言うならば、それは人の集合無意識の世界　つまり人の心と記憶の集合体であるが故に、地獄という普遍的概念は存在するということだ。

この門は、ルルーシユの意識が創りだした地獄への入り口というわけだろう。

Cの世界は輪廻の海。いずれは集まった記憶や心は再び別の肉体へと宿る。

しかし、ひとたび地獄という名の負のエネルギーに取り込まれてしまえば、容易にそこからぬけだすことはできない。

永遠とも思える時間を、苦しみの中で過ごさなければならぬと、

C・Cは言った。

だが、それこそが

「人々に、ギアスをかけたことへの代償か」

人の意思をねじ曲げ、明日を奪い取ったことに対するせめてもの罪滅し。

王の力はお前を孤独にする　それは、いつか聞いたC・Cの言葉であった。

ルルーシユは顔を伏せると、不敵な笑みを浮かべてみせる。

「フフフハハハハ……！　まさに魔王に相応しい末路じゃないかい。いいだろう、覚悟ならばとうに済ませてある。希望はすでに預けてきた。今更臆することなどありはしない！」

その瞬間、厳かに門扉が開いた。

その向こうには、周囲の闇をも飲み込むかのような深淵が覗いている。

ルルーシュは、怯むことなくその門の内側へと足を踏み入れた。

2

「こゝら、ルルーシュ！」

突然頭を叩かれ、ルルーシュは眠りから覚める。

「今寝てたでしょ？ 手が止まってた！」

そういつてポカポカと丸めた資料で彼の頭をたたき続けるのは、彼が通うアツシユフォード学園の生徒会長であるミレイ・アツシユフォードだ。その名の通り、この学園の理事であるルーベン・アツシユフォードの孫娘でもある。

「だからって、叩かないでください」

ルルーシュがそう言って抗議すると、ようやくミレイの手が止まり、ルルーシュは叩かれた箇所へと手をやった。すると、そこへ横合いからちやかすような声がかけられる。

「俺を置き去りにした罰だつて」

「そうそう、何やってたのよ、昨日」

声の主は、ルルーシュの友人であるリヴァル・カルデモンドとシャリー・フェネットである。

「ああ、いや……」

シャリーの問に対してルルーシュは言葉を濁した。まだ寝ぼけて

いるのだろうか、何だかあたまがすつきりしない。昨日何をしていたのか、はつきりと思い出せずにいた。

「はいはいはい、話を脱線させないの！ 今は部活の予算審査、とつとと済まさないよ。どこも予算が下りないでしょ？」

丸めた資料を叩きながらミレイが一喝すると、生徒会室の端でパソコンのキーボードを叩いていた眼鏡の少女　ニーナ・アインシュタインの手が止まる。

「そんなことになったら……」

「馬術部なんてマジ怒り。またここに突入してきたりして」

ニーナの言葉を引き継ぐようにしてリヴァルが言った。

「うえ……」

そのときのことを思い出したのか、ミレイが顔を顰めると、ちょうど外から馬の嘶きが聞こえてくる。

「リヴァル、あんたも一応生徒会メンバーなんだから」

ミレイがそう非難すると、今度はシャーリーがミレイに対して抗議する。

「せめてもう一日早く思い出してくれていればよかったですよお」

それに対して、リヴァルがシャーリーの言葉を指摘する。

「もう一日『遅く』が正解。あきらめがつく」

「いい考えた。今からでも……」

リヴァルの言葉にルルーシュが追随すると、大きく息を吸い込んだミレイがひと息に声を張り上げて言った。

「ガア　　ツツ!」

びっくりして皆啞然とミレイの顔を見つめる。

「またガッツの魔法ですか？」

リヴァルが代表してミレイに尋ねると、彼女はニンマリと笑みを浮かべて言った。

「ハーイ、あなた方は頑張りたくなりまーす!」

「かかりませんよ、そんなインチキ魔法じゃ……」

ルルーシュがやれやれと肩を竦めると、それを見たシャーリーが声を上げる。

「会長、私かかったことにしまーす」

「うん、肉体派は素直で宜しい」

「鍛えてるって言うてくれないと!」

シャーリーが得意げに力こぶを作ると、「そうじゃなくてさあ」とミレイが笑みを浮かべたまま言葉が続けた。

「立派じゃん」

「え?」

ミレイの視線の先を追いかける。行き着いた先は、シャーリーのふくよかな胸。

「こないだ女子寮のバスルームで確かめた　トップとアンダーのバランスがいいよねえ」

「ほほう」

ミレイの言葉に、リヴァルが息を漏らす。シャーリーは慌てて胸元を両手で覆うと、ミレイに抗議の声を上げた。

「な、何言ってるんですか！　変態ッ！」

そんな恒例となった日常的なやりとり。こんな日が永遠に続くと思っていた。

続けばいいと、思っていた

3

どこまでも続く瓦礫の山。

先程まで笑い声の絶えなかった学び舎が、ルルーシユの足元で今や無残な鉄骨の残骸と化していた。

「何だ、これは……？」

地震だと思った。あの後突如として大きな揺れが生徒会室を襲い、ルルーシユは机に頭をぶつけ昏倒してしまう。次に目が覚めた時には、すでに今のような状態であった。

そして、ルルーシユは揺れの正体を知る。

未だ断続的に揺れるその向こうで、複数のナイトメアが交戦していたからだ。それは、間違いなく戦争であった。

「そつだ、皆は」

はつとして首を巡らせたところで、ルルーシユはそれに気づいた。関節がありえない角度に曲がり、血溜まりの中に沈む友の姿。リヴァルもシャーリーもミレイもニーナも　もはや物言わぬ骸となっていた。

「　　っ！」

その光景を前にして、ルルーシユは叫び声を上げることできずに、気づけば息も絶え絶えになりながら嘔吐していた。

ナナリー。ナナリーはどうなった？

大切な妹の安否を心配し、ルルーシユが顔を上げたところで、それは空から現れた。

金と黒のカラーリングが施された巨大なナイトメア　ガウエイン。どうして自分がそんなことを知っているのか考える間もなく、機体から出てきた人間にルルーシユは目を見張った。

黒い仮面に、黒いマントを身に纏ったその人物。いや、大事なものはその人物が抱えた少女の方

「……ナナリー！」

ルルーシユは仮面の人物を睨みつける。どこかで会ったことがある気がするのだが、今はそんなことはどうでもいい。

「お前がやったのか！　これを、この惨状を！」

確信があったわけではない。ただ、漠然と目の前の人間こそがすべての元凶なのだと理解した。

「正義のために必要な犠牲もある。仕方のないことだった」

冷たい声。その言い草に、ルルーシュは「ふざけるな！」と声を荒げる。

「無関係のものを巻き込んで、殺して……何が正義だ！」

「巨悪を討つために悪をなす。それが私の正義だ。恨んでくれていい。だが、世界が明日をむかえるには必要なことだったのだ」

「必要なことだと？ そんなものは欺瞞でしかない！」

「……そうだな。それこそがお前の罪だ」

ナナリーを抱えたまま男が仮面に手をやる。その下から現れた顔は

「……俺、だと？」

「そうだ。私はゼロ。復讐のためナナリーのために生み出されたもう一人の君だ」

ルルーシュはようやく理解する。

これこそが自分の向き合うべき罪なのだ。

いつわりの仮面を被り、人を、自分自身さえも騙して

「……ル……ル……」

目の前ではなく背後からの声に、ルルーシュはびくりと震えた。恐る恐る声の方を振り向けば、血だらけの友人たちが苦しそうにこちらを見ている。

「……ルル……シュ……」

必死に伸ばすその腕を前に、ルルーシュはなすすべもなく立ち尽くしていた。

「あ……ああ………」

視界がぐにやりと歪み、足もとが沼地に浸かっているかのように重くなる。

ルルーシュの顔が、今度こそ絶望に歪んだ。

4

再びルルーシュは闇の中にいた。

いや、闇そのものがルルーシュであったという方が正しいだろうか。意識は希薄で、どこまでも広大な闇に溶ていく

そんな闇の中であって、ルルーシュの名を呼ぶ声が聞こえる。

もついいだろう。放っておいてくれ。

辛くて、苦しくて。目を開ければまた先のような絶望をまざまざと見せつけられるのではないかと怯えた。

けれど声は、ルルーシュの名を呼ぶことをやめない。懸命に彼の名を呼び続ける。そうして、とうとう声は彼の存在を見つけた。

「ルル。ようやく会えた」

声は光に。その眩いばかりの光は、闇の中に溶けていたルルーシュを照らし出していた。そのルルーシュの前に、ひとりの少女が立っている。

「……シャーリー？」

それは確かに彼の友人であるシャーリー・フェネットであった。先程の血溜まりに沈む彼女の姿と重なり、ルルーシュはびくりと震える。

「迎えにきたの。ルル、私と一緒にいこう」

そう言うてにっこりと微笑む彼女に、しかしルルーシュは首を横に振った。

「駄目だよ、シャーリー。俺は……」

ジヤラリと金属の擦れる音がする。ルルーシュの足には、彼をその場に留めるよう足枷がつけられていた。その鎖は、ルルーシュの罪の証だ。

「……駄目じゃない。駄目じゃないよ。ねえ、私が拳銃でルルを撃ってしまったとき、ルルは私のことを赦してくれたよね。今度は私があるを赦す番。本当はね、ちゃんと伝えたかったの。世界中の誰もがルルのことを赦さないのだから、私は、私だけはルルを赦してあげるって。ルルは優しいから、きっと自分で自分が赦せないんだと思う。でも、これ以上苦しめないで」

「シャーリー……」

シャーリーがルルーシュの手を取る。

「そつだよ、兄さん」

いつのまにか、シャーリーの後ろに少年が立っていた。アッシュブロンドの髪に幼い顔立ちをしたその少年の名を、ルルーシュは呼ぶ。

「ロ口、俺はお前をさんざん利用して……」

「兄さんが僕を人間にしてくれたんだ。例えそれが偽りの日々であっても、あれだけが僕にとっての本当だった。だから僕は命をかけることができたんだ。それでもそれが罪だというのなら、僕も兄さんを赦したい」

そういつて笑うロ口を前に、ルルーシュは顔を伏せる。

「ルルーシュ」

シャーリーでもロ口のものでもないその声に、ルルーシュは弾かれたように顔を上げた。

「ユファイ……」

ロ口のさらにその向こう側に、彼女はいた。ユーフェミア・リ・ブリタニア。ルルーシュの腹違いの妹であり、彼がその手で殺してしまった少女。

彼女はルルーシュの前まで歩み寄ると、

「ルルーシュ、悪いことをしたら何て言えばいいのか知ってる？」

ユーフェミアは怒った顔をして、そう尋ねた。

ルルーシュはいくつもの謝罪を思い浮かべるも、どれも言い訳にかならない気がして、ようやくひと言だけ発した。

「「」めん……」

「はい、赦してあげます」

間を置かずに、につこりと笑みを浮かべそう言った彼女を、ルルーシュは呆然とした顔で見つめる。

「え？」

「聴こえなかった？ 赦してあげるって言ったの」

「俺は、君に酷いことを……」

「私が赦してあげるって言ってるのよ？」

「……俺は、赦されてもいいんだろうか」

戸惑いがちにそう言ったルルーシュに、

「私が、私たちが貴方を赦します。それでもし赦してくれない人がいるのなら、私たちが一緒に謝ってあげるから」

ユーフェミアが力強く頷く。他の二人も、同じように頷いてみせた。ルルーシュの足に繋がれていた鎖が、パキンと音を立てて崩れ落ちる。そうして、闇の中に一筋の光が差し込んだ。

「行きましょう、ルルーシュ」

差し出されたその手をつかむ。右手にシャーリーの、左手にユーフェミアの手を取って、四人でそのままゆっくりと光の方へと向かっていった。

この世界は輪廻の海。その魂は、いずれ別の肉体へと宿り

*

それはどこかの森であった。

鬱蒼と生い茂る草木を掻き分け、やがて対岸に古城の見える湖畔へ

と抜ける。

そこには、すでに先客の姿があった。
長い髪とスカートを風にたなびかせた少女。

そう。自分は彼女に会いに来たのだ。

彼女はまだこちらに気づいてはいない。だから、後ろ姿の彼女の名前を呼ぶ。

振り向いた彼女は少しだけ驚いて、それから少しだけ怒った顔で言った。

「全く、お前は酷い奴だな。いくら私が魔女とはいえ、待ちくたびれてしまったぞ」

それから散々文句を言う彼女のもとへと歩み寄り、

「おい、聞いているのかルル」

彼女が言葉を言い終える前に、お互いの唇を重ねた。それから、ゆっくりと離す。

「……待たせた罰だ。もう一度呼べ、私の名を」

彼の唇がかつてC・Cと呼ばれた少女の名を紡ぐ。
その名は

君の名を呼ぶ（後書き）

おしまい。

所用があつて遅れました。が、ギリギリ今日中にあげられた、かな？
もともとAFTERのラストにもつてくる予定だった話です。

ただ、まああまりにも某ファンタジーの大御所と似た感じのラスト
になってしまったので、ボツにしました。

でもけっこう好きな話です。なので、どっかに書いておきたいと思
い、書いてみました。

この間データが全部とんじやったので、若干話しが短くなってしま
いました。が、まあ形にはなったんじゃないかと。

何はともあれ、これにてSSは終わりです。次はAFTERのラス
トで。

感想をいただけると非常にありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9964/>

コードギアスSS

2011年11月16日19時51分発行